

鼎談…研究と教育を顧みて

出席者

宇野健吉 (U)

工藤和久

(Q)

天野昌功

Q 本日はお忙しい中を有難うございます。ご退官に際しまして先生の生い立ちや、今までの研究・教育活動をふり返って、思い出話や印象をざっくばらんにお話しただきたいと思えます。まずお生れは。

U 東京です。父は熊本です。父は大学進学の時こちらへ出て来たようです。小学校は昔の附属でした。

Q 高等師範の附属という雰囲気もそれなりのものがあつたでしょうね。

U 今のようなエリート校というか、そういうことはなかったです。いろんな家庭の人が来ていました。

Q 私が札幌にいたころ、北海道の現教育大附属小というのは、帽子に房なんかついて特徴ありましたが、先生は

鼎談…研究と教育を顧みて

いかがでしたか。

U ええ、そうですね、一、二年が赤房で、三年から六年までは白房がついて、普通の丸い帽子のと違って前から見ると三角形でした。僕はその帽子がいやでした。幼稚園といわれるんですよ。赤帽の時、特に。

Q 授業はどうでしたか。

U さあ、並ですよ。ただ時々、実験校ですから春と秋によその小学校の先生が参観にみえまして、担任の先生が緊張してよくできる子だけあてるということがありました。その間は先生も怒らなかったですよ。少し窮屈だったけど、おわるとうれしくて、ほっとしましたね。

Q 先生は優等生でしたか。

U いやあ、優等生じゃ……。順位はもちろんつけないし、自分ではできないと思っていました。アイツはできる、コイツはできるとやっけていきますと、真中か、真中よりちょっといいくらいでしたでしょうね。

Q 何か得意なものがありましたか。

U いいえ、でも、この間出てきた通信簿見ましたら、それ程悪くはないですね。

Q 小学校に入られたのは昭和何年でしたか。

U 四年じゃなかったかな。満州事変の少し前であまり景気よくない時期ですね。

Q 昭和五年が金解禁ですね。

U そうですね。

Q 不況の時期ですね。物価は下落していた。そうすると昭和十年まで小学校におられましたね。

U 昔は八つ上がりですね。

Q お父様（宇野哲人）は何をなさったのですか。確か東大の教授でしたね。

U はい。

Q お父様の御印象とかはどうでしたか。御家庭での教育はどんなでしたか。

U たとえば勉強してくれたとか「勉強しろ」とか、それは全くありませんでした。とも角うるさく言われていやだったことは無かった。

Q 講談社からでている『論語新釈』を宇野哲人先生が書かれたのは昭和四年ですが、この頃のお父様のお仕事の御記憶などありますか。

U いや、全くないですよ。だいたい朝食は一緒に食べるけど、昼はもちろんいないし、夜も食べないし、土、日位いたかな？そう話するってことも無かったですね。帰ってくると近所の子と遊ぶのが忙がしくって、ランドセルほおり出して、サッサと遊びに行っていましたよ。

Q 当時の遊びは何ですか？

U かくれんぼ、戦争ごっこのようなオニごっこでした。高橋内閣はその頃かしら。高橋蔵相は？

Q 蔵相は六年頃からです。金解禁をやったのは井上準之助です。これは昭和五年ですから、その後ですね、昭和四〜五年頃小学校におられたわけですね。日本にとっては、クリティカルな時期ですね。昭和五年が一九三〇年ですから、不況、大恐慌の入口ですね。昭和五年に金解禁になってますます不況に拍車がかかっていくわけですね。

U そうです。

- Q 昭和六年の終わりに金輸出再禁止がありましたね。あの一カ月程後に、井上が暗殺されるわけです。
- U ああ、そうでしたね。
- Q あの時期は浜口雄幸を撃つとか、その前、原敬、七年には井上準之助、団琢磨の暗殺、五・一五事件などずいぶん大きくさい血生臭い時ですが、その御記憶ありますか。
- U いや、ありませんね。五・一五事件なんかはワーワー騒いでいるのはわかっていましたでしたが、それがどういうことで、どうなっているということは全然知らなかったですね。それより大分後でしょうね。美濃部達吉さんなんかの問題がおこってきたのは、たしか昭和一〇年頃になりますか。
- Q ちょっと、はつきりしませんが、当時の首相や議会まで美濃部さんの「天皇機関説」に反対したわけですね。その御記憶はありますか。
- U 満州事変とか上海事変というのは覚えています。それから皇太子が生まれたってというのは何年でしたか。
- Q 昭和七、八年ですか。
- U その頃でしたか。
- Q 小学校時代のことでとくに記憶されていることは何かありますか。
- U いい記憶って本当にないなあ、とに角はやく卒業したかった。
- Q 附屬小には個性的な先生が多いと聞いていますが、当時はいかがでしたか。
- U 後から聞くと偉い先生だったということもありますが、正直言って僕達の担任の先生は、こわい先生で、ビリビリしていたもんだからとに角おこられないよう、目につかないようしていました。一日中、担任とつき合う訳だか

ら、とても羽を伸ばすというところがなくてねえ。

Q お住まいはどこでしたか。

U 小石川の角栄さんなんかよりずっと奥より。目白の駅からずっと入って行って、日本女子大、学習院なんかあって、そのもう少し先の教会と椿山荘と田中角栄の目白御殿を右に入って行ったところにあります。

Q なかなか、すばらしいところですね。

U 昔の細川家のお屋敷の中です。

Q というのは、先生のお宅は細川家の仕官だったのですか。

U そうでしょうね。熊本ですから。家来ではあったようです。

Q 中学の時の勉強はいかがでしたか。経済学は。

U いや、まだまだ。中学では「公民」という科目がありましたね。今の社会科でしょうね。「コトミン」のミンは「公眠」ともいいました。一度裁判所へも見学に行きました。普通の重要四科目英数国理、また地理とか歴史とか科学、昔は教練というのもありました。僕は中学の時、弓を引いていました。だからあまり勉強していた記憶もありませんね。

Q クラブは弓、お上手ですか。

U いや、それほど。段を取る程興味もなかったですが、試合には、ずい分出ました。学習院とよく試合をやりました。

Q そうすると中学を卒業されたのは昭和十五年ですね。

U 僕は病氣しましたので、十六年です。肋膜炎をやりました。

Q もう戦争がはじまりますね。

U その前の年が紀元二千六百年というのでしょう。支那事変が激しくなっていてオリンピックを返上しましたね。夏休みに土手を崩すのをやらされました。その頃から戦争が起こりそうだという感じがありました。戦争はもうとっくに昭和十二年からやっていましたけど。

Q それから、一高へ入れられたのですね。試験はどうでしたか。

U そんなに、大変だとは思わなかったけれど、今から見ると大変だったのかなあ。秋までは普通に行っていました。夏休みの終わりに一週間か十日受験のための補習がありました。二学期になっても普通の授業やっていました。僕は秋に弓の対外試合があるとかで、試験勉強ばかりしていられなくて、応援に行ったりしていました。身を入れてやり出したのは十月、十一月近くになってからでした。今と違って科目は何が出るかわかりませんでした。まずその頃のことですから国史は必ず出ると言われていました。今の共通一次じゃないけど、僕達が受けた時に全国の高等学校で同じ問題が出ました。何と英語がなかったんですよ。数学があってね。

Q それでは一高時代のお話しを。

U 昔の旧制高校は全寮制でした。特に一高は、三年間ですが一般部屋と部の部屋と両方ありました。僕は弓道部へ入りました。一高は三高と試合をやりました。一年の時はちゃんとやりましたが二年の時ははつきりしない。その前に記念祭をやりました。大学祭ですね。僕の時はお馬場でした。一高は昭和十二年に向ヶ丘から移ったんです。授業はまあほとんど語学でした。第一語学の独語が週に十一時間ありました。英語でさえ四時間でしたか。国語二時

間、漢文二時間位でした。一週三十四時間位のうち二十時間位は語学でした。たとえばドイツ語の時間、文学の好きな先生は、ヘッセとかトーマス・マン、ヒルティの『幸福論』なんかを読む。むつかしくてね。日本語でさえむつかしいのにドイツ語で読まされるんだから。一年の時、十一時間を、一人は文法、一人は小説を読むんですよ。一人はペッツォールドというドイツ人の会話の先生でした。この先生はずい分古くから日本にいて、お坊さんになっただけらしいですよ。三十年頃亡くなったと新聞に出ていました。

Q 一高の時に大東亜戦争が始まりますね。

U そうですね。冬に朝五時頃から弓道場で寒稽古の弓を引いて、終わって七時頃、みんなが騒いでいて、どうしたんだろうかと思っていたら「戦争が始まった」と言っている。食堂にだけはラジオがあってチャイムが鳴って、軍が開戦のニュースを流しました。「ヤッター」と思いました。

Q 「ヤッター」とは？

U やはりね、日本が困っているということをししひしと感じていました。御存知？ ABCD包囲網なんて。油は来ないし、まあ国際的に干されているって感じてました。どこかで突破するというようなことをしなくてはいけないという気持ちを持っていたんでしょね。ついにやった、ついに立ち上がったという気持ちでしたね。困った状態になったとも思っていました。それより威勢が良かったんですね。それからハワイ攻撃とか、プリンスオブウェールズ撃沈ということがありました。ちようちん行列したりして大騒ぎでした。

Q 弓道部というのはまあ表現悪いですが、右翼的なところでしたか。

U そうねえ、そういうところはなかったと思います。保守的かもしれないけど、左翼主義的なものもいて、先輩の

中には引っかけた人もいましたよ。僕達の頃には第一、マルクス主義何ていうのはほとんど聞いたことがなかった。ただ日本は戦争なんかしてめちゃだめだという話しはよくしてましたよ。コンバなんかで飲んだ後、「負けるんじゃないか」と言っていて、たたかれた覚えがあるけど、なぜ僕がそんな風に思ったかははっきり覚えていないです。

Q アメリカと戦えば負けるのではとは、ずい分いろんな人が思っていたんじゃないですか。

U でしょうね。心の中ではある程度のこと知っている知識階級の人なんかは。

Q 一高生活というのは主にスポーツと語学ですか。

U そうですね。

Q 一般的にそうだったんでしょう。

U そうですね。まあ、特別な人は哲学・人生に悩むなんて人もいたでしょうがね。僕達のいた頃は、先生は昔ほど変わった人いなくて常識的な人多かったけど。龍沢五郎という人がいてドイツ語の哲学の先生やっていましたが、僕は哲学でなくドイツ語習いましたが、向こうとこちらと語句の配列の順序が違うんでしょう。訳す時、どうしてもひっくり返すでしょう。そうすると怒るんだよ。頭から訳さなくてはいけない。とてもおかしな気がして、それも良かったんですね。

Q 日本語になりませんか。

U ええ、それはなぜかと言うと、要するに、訳しちゃダメだということだった。日本語でなくドイツ語で読めということでした。その先生には、一高で病氣した時、見舞いの手紙を頂いて、その時返事の手紙を書いたつもりだっ

たのですが…確かに書いたのです。ずい分たってからそれが本の中にはさまったままだったのです。出すのを忘れてしまったのです。それで友達に頼んで十分にあやまってくれるように頼んだ。言ってくれたらしくて、それで又恐縮してしまっただけで「真心は通じますよ。」と言ってくれたんだって。本当に参った。偉い先生だったと思うよ。確か戦争終わった時、たくさん先生やめられたけど、龍沢先生もやめられたと思うよ。まあ、お年も相当だったかもしれないけど、まだ停年前だったよ。

Q 河合栄二郎は一高でしたね。

U どうでしょうね。東大ではないですか、もちろん僕は教わってないですけど。

Q 安部能成さんもでしたね。

U 安部能成さんは校長でしたね。

Q 何か御記憶ありますか。

U いやあの先生は髪振り乱したような人でした。まあ校長先生なんて偉いと思っているでしょう。

Q 木村健康先生はどうでしたか。

U 木村さんは「法制経済」という授業でした。変な話ですけど、二度位しか出いいない。ですが「限界効用逓減の法則」というのをやっています。しばらくして、あまり出ないのも悪いと思って出たら前と同じことをやっていたので、あればかしゃっていらしい。

Q 先生は、ドイツ語お得意ですか。

U 大学出るまでは良かったですね。

Q 学生時代の交遊について少し。

U 弓引いていたので、その人と一緒に試合へ行ったりしました。中学から一高へ一緒に行った、クラスの成績が一番の友達とか。僕に似て、兵隊へ行って帰って来て病氣して、僕より遅く卒業し、浜松へ行って先生になっている大野木吉兵衛とか。どういうわけか心に残っていますね。京都へ試合へ行った後、一緒に紀伊半島をまわった友達（大倉貞隆）も勿論今も親しいですが、そいつは偉くなりすぎちゃって。

Q 一高は三年間ですね。一高の時、経済へ進もうと思われたんですか。

U 試験を受けたのは高等学校入学の時だけです。大学の時はなかった。戦争末期ということで。文学部はおやじも兄もやったことだし、法律はとでも大変で、病氣したこともあってお袋もとてもいやがったし……。で消去法で、経済しかありませんね。それと、木村先生のところへ相談に行ったら「社会の構造の基本的なことだから」と、おっしゃるので。

Q 大学へ入られたのは昭和十九年、戦争の真最中ですね。

U 十九年の秋の入学で、二年生は兵隊へ行ってしまい、学生は一年だけでした。来年からは君達も行かなくちゃならないというので、九、十、十一月の間に一年分の授業をやってしまおうというんです。科目は舞出（長五郎）さんの原論。毎日朝の八時頃から三時頃まで一生懸命ノートをとりました。

それに、橋爪（明男）さん。橋爪さんは「経済政策」をやっていました。軍人も来ていて、「戦争論」か何かやっていました。

Q 二十年に入ってから講義は全くなかったのですか。

U ええ、全く。軍事管理局ってどこへ行ったと思います。軍需品の調達のためにわかれた局が有楽町あたりにありました。三月に大空襲で、その後、入営しました。東京駅のプラットフォームに立つと、爆撃で焼けて何もなくて、海まで見えませんでした。

Q 熊本で入営ですか。

U 熊本からはまあ、戦地に行かないですんだ。いやだったなあ。戦争なんかない方がいい。病気したりして遅れて、一種の学徒動員でした。普通の歩兵の教練で、毎日、鉄砲持って訓練させられました。他の人は、ゲートル巻くの早いし、鉄砲の部品についてよく知ってるし、軍人勅諭についても長いのをみんな驚く程よく知っていた。その頃、青年学校というのがあって、みんな教練なんかやっていたらしい。

Q 先生の御家族は東京にいらっしゃったのですか。

U ええ。うちの一画だけ焼けずに残ったのです。

Q それでは、戦後になってからの先生の研究とか、先生の師事された先生のこととか、研究仲間については、いかがでしたか。

U セミは木村先生でした。大石（泰彦）さんとか、館（龍一郎）さんとかに指導をお願いしたのは戦後です。戦争中には、近経は古谷（弘）先生しかいませんでした。山田盛太郎さんなんて戦後に有名な先生だと名前だけ知りました。今、考えてみると、戦争っていうのは、先生方も勉強できなかったようです。というのは、戦後古本屋で見つけた戦後の講義のプリントを見ると、戦前の講義と、ほとんど全く同じだったのです。

Q どなたが指導教官でしたか。

鼎談…研究と教育を願ひて

U 木村先生です。

Q そのころ木村先生は東大へうつっておられたわけですね。どういう本を読まれましたか。

U ケインズの『一般理論』だったと思います。原書講読はヒックスの『価値と資本』でした。

Q その頃、小宮(隆太郎)先生や稲田(猷一)先生がいっしょにいらっしゃった訳ですね。

U ええ、小宮さんはいれ違いくらいでした。稲田さんは数学科でした。

Q 古谷さんと木村さんが近経で、それからマル経は大内(兵衛)先生や、宇野(弘蔵)先生でしたね。

U 大内さんが先です。

Q 先生は、学部の学生でしたか。

U えー、学部卒業の前後のことです。

Q で、大学院へ入られたんですね。

U ええ。

Q やっぱり木村先生につかれたのですか。

U ええ、そうです。あの頃木村先生の演習には渡辺経彦さん、大沢豊さん、宮下藤太郎さんとか内田(忠夫)さんも出てたかな。それと小宮さん。なかなか多士済々でしたね。

Q どういう研究をされていたのですか。

U やはり『一般理論』をやろうと思って。今は『一般理論』なんか解説書のいいのがたくさん出ているけれども、
当時は、ディラードの入門書があるくらいで、それも何だかちんぷんかんぷんでわからなかった。それに較べて

『価値と資本』なんてのはすっきりしていい。でも数学がむつかしかった。一時は随分苦勞しましたが、やはり数学はだめだということと結局離れてまいりました。

Q 古谷さんの本が出たのはいつですか。

U あれは、二十六、七年だと思えます。

Q その頃の近代経済学の研究というのは随分活気というか熱気があったと思いますが。

U ありました。一橋と慶応と、東大と持ち回りで毎月、研究会をやっていました。その頃、篠原三代平さんとか福岡正夫さんとか、福岡さんはまだ学生だったかなあ。東大では、古谷さんなんかが中心となって、随分勉強しました。私は主としてケインズとヒックスをやったけど、結局、ケインズに戻るという感じでした。

Q そういったものは戦後になって初めて読まれたんですね。

U 勿論。ケインズの『一般理論』はとも角最初の第二章か第三章で、もうお手上げでした。しかしクラインの『ケインズ革命』が出てやっとすっきりわかりました。それからヒックスの「ケインズ氏と古典派」が出てくるんですが、僕の記憶では、「ケインズ氏と古典派」のタイプで打つてあるのを売って歩いてる人がいて、買って読んだ覚えがあります。

Q 進駐軍のところに雑誌があって、そこへ筆記に行ったということを知ることがあります。

U そうです。あの頃、みんな筆記でした。今のようになりっぱなしのコピーの機械などありません。マイクロフィルムもありましたが高くて手が出ませんでした。話し違いますが、なにか論文を読もうと思つてコピーすると安心するか読みませんね。筆記のときには書き写しながら読んでるわけですね。苦勞して借りて写して一生懸命勉強したノ

ートは今も捨てられません。やがて、イギリスから本を買えるようになり、一ポンド千八百円位で、はじめて買った時は高かったです。ケインズの『一般理論』でした。

Q 修士論文は書かれましたか。

U いいえ。

Q 先生が最初に書かれた論文は？

U ヴィクセルの「累積過程」のこと勉強したので「累積過程」についてが最初でした。

Q それは活字になりましたか。

U はい、都立大学で。

Q 都立大学に就職されたのはいつですか。

U 二十五年です。

Q 先生のお後のお仕事の話しをしていただけますか。ドーマーの本を訳されましたね。成長論ですね。

U 三十一年頃から始めましたかねえ…。当時、都立大学の国際経済学の先生で喜多村さんという方がアメリカにいらして、ドーマーの訳の話しを持ってこられ、東洋経済にお願いしました。東洋経済が都留さんに監修を頼みました。論文集というのはやりにくかったです。

Q まだ定着していない術語もありましたでしょう。

U あります。今になってみれば何ていうことないんですが。たとえば「ウォール・ストリート・ジャーナル」、新聞なのか雑誌なのか実物知らないの、「誌」にするか「紙」にするか。結局、「ジャーナル」にしました。

Q まあ、その方がいいですね。それで先生は有名になられた訳ですね。一応簡単に内容を説明して頂きまして、先生のドーマーのお仕事についての感想、評価はどうですか。

U 結局、思うのは、『一般理論』から出ているということですよ。それに対してハロッドの方は貯蓄・投資均等から出ているのかなあ。投資というのはケインズの場合、需要の一項目ですよ。C+Iといった。そして新投資が乗数効果で所得の増大をもたらすといった場合の需要側面としてとらえているわけでしょう。一般理論を読んでいる時にも研究会とか授業の時に、よく問題になったんだけど、投資された部分はそのあとどうなるんだって、よく話したんです。そのことがケインズも『一般理論』の注のところで、ちょっと触れていたと思いますけれど、見落とされているところをドーマーが、この投資が経済的効果を持たないはずはないんじゃないかと。それで、それは供給と言っても、つまり投資と言っても、ドーマーの中に書いてあったけど機械とか設備といった言葉だっと思うけど、そういうものに体现されないと投資という常識というか一般的な通念とは少し異質なものになってしまうんです。もし常識的に考えて投資というものが単なる在庫の増加じゃなくて、そういう設備とか機械といった生産力と結びつくようなものであるとするならば、これが供給に作用しないはずはない。というところから、投資の二重性ということをはじめめるわけですよ。そして需要と供給は等しくならなきゃいけないというんで、新投資が、投資の増減があった時に、それが需要面で増加するのは乗数理論としてのものである。供給面の方で増大するのは生産能力だということです。その新たな生産力によって増加する供給と、乗数理論によって増加する需要とが均衡では等しくならなければならない。でそれをイコールで結んでその式を変形して成長率を出すってのが基本だと思います。私は、自分でもケインズの『一般理論』で投資というものを、戦争と一緒に言ってたかどうかは忘れ

てしまったが、鉱山を掘り出しては又、埋めるというような、あるいは道路の掃除が所得を産むというようなところがあったと思うんだけど何だかちょっとね。どうもおかしいような気がしたものですから、僕にはドーマーの成長理論の説明は、わかりやすかったんです。

Q ドーマーの成長論は、生産設備が大きくなって供給能力が大きくなるという面というのがとり入れられているわけですね。

U そうだと思います。

Q 市場の均衡のためには、投資が大きくなるわけではないということではないですね。

U 一度投資が行なわれると、均衡水準というんじゃないかと、どんどんふえていかなければいけない。だからルイス・キャロルだったかな。

Q 『不思議の国のアリス』ですね。

U 『鏡の中』という感じがすけど、あの中で、「……ここは、不思議の国です。……ここでは、ここにいるためにも走っていなければならぬ……」と、副題のところを言っていましたね。均衡を維持していくためにも、投資も次から次へとふえていかなければならぬ。所得ももちろんふえていかなければならぬ。何ていうか。ジレンマみたいなものを生じる。

Q 大分後になって、外債の問題を研究されるわけですが、それはどういう経緯からですか。

U はっきり覚えていませんが、金融学会で高垣（寅次郎）さんが「貨幣制度」だったか「銀行制度」だかの成立過程のお話しをなさったのです。その時吉田清成という人の名前を出されて、この人はどういう人だかよく分らない

ということだったんですが、そのことが頭に残っていましたね。それはその時だけで僕は歴史の研究なんて思ってもいませんでした。その後、明治百年というのはいつでしたか：昭和四十年くらいですね。地銀協の研究会で、みんなで協同研究しましょう。テーマをわけましょうということでした。それより前から国際金融みたいなことを僕はやりかけていました。大勢の中で一橋の小泉明先生も国際金融をやっていたらよかった。

Q 都立大へ二十五年に就職されたわけですが、何年間おられたのでしょうか。随分、いろんな思い出があると思いますが、その中で特に印象深いのは。

U 学園紛争は昭和四十二年頃でしたか？ あれは僕にとって相当な、個人的な変化をもたらしたという気がします。正直言って僕は都立大学でいい思い出ばかりというわけではないですね。僕は元々、学生に対して親しくしていたつもりです。ところが紛争の時学生の中には、オレ達学生がいなかったらお前達は飯の食い上げだ。だから当然の権利として教授と同じ権利を主張していいんだ。研究室をよこせと言うようなものもいます。いろいろありまして、それから学生に対して以前より不親切になったと思います。昔の僕にもどれないんです。大学が変わったんでしょうか。時代もかわるだろうけど、元にもどればいいと時々、思いますね。

Q 総括みたいなものをお願いしたいのですが。

U 僕は、今の経済学がこういう状態になったのは、一つに、専門化しすぎたからだと思います。経済学という言葉は、エコロジなどよく言われている社会生態学を経済学と言っているといってもいいと思います。一般均衡とか何とか、バランスの問題でしょう。だから非常に細かな精密な、厳密な理論が、学問に、科学や社会科学に必要だと思いますが、充分に論証されていないようなものでも、もっと領域を広くしていくことが、経済学に課せられ

た問題じゃないかと思えます。テクニカルになりすぎてますね。思想的、哲学的なものがもう少し研究されて、充実していくといいと思えます。

Q 学問だけでなく、先生の今までの人生でいろいろ感じられたことをお願いします。

U この頃僕は、後をふり返っているとだめだと思えます。やはり前の方、前の方見てね。過去にあったことというのは、とり返しがつかないけれど、それが将来の自分の生き方によって変わる、つまり、評価が変わるといことはあると思う。僕も研究過程で、一生懸命計算して思うような結果の出ないことが、ほとんどでした。でも、そういうことを記録に残しておいてもいいんじゃないかなあと最近思うようになりました。つまり失敗の記録というものも必要なんじゃないかと思えます。後から来る人が同じことをしないですむし、失敗の論文を後の人が見て、まちがいを直したら一般理論になったということはないだろうかと思っています。

ちょっと話しは違いますが、一時、ベストセラーと言われているものを読んだりしてみました。目が見えなくなつてからは女房に読ませただけだね。おもしろいのは勿論あるんだけど、やっぱり古典とか、昔書かれて今でも残っているものは味わいがありますね。そんなに古いものじゃなくてもいいですが、「自然は飛躍せず」と言ったのはマーシャルでしたかね。自然だけでなく理論もですね。経済学史の中にも限界革命とかケインズ革命とか、革命と名の付く出来事がありますが、やはり多くの研究者の地道な努力の積重ねが学問の発展を支えているという気がしますね。

Q それでは時間も尽きましたようですのでこれで終りにしたいと思います。長時間どうも有難うございました。